

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第269集

芝宮遺跡群

下曾根遺跡ⅩⅠ

長野県佐久市小田井下曾根遺跡ⅩⅠ発掘調査報告書

2020. 3

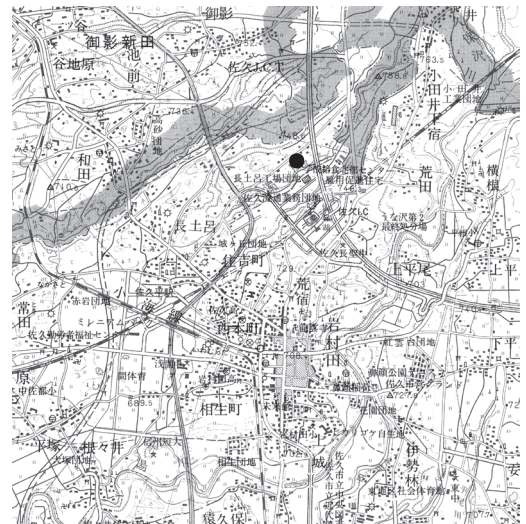
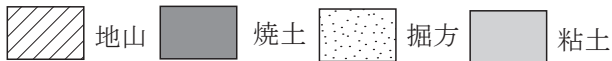
佐久市教育委員会

例 言

1. 本書は、有限会社 サンコー地所が行う宅地造成工事に伴う芝宮遺跡群下曾根遺跡X I の発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 有限会社 サンコー地所 取締役 村松興三
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 芝宮遺跡群 下曾根遺跡X I (O S S X I)
1 8 2 m²
5. 所在地 佐久市小田井字下曾根 8 1 - 1
6. 調査期間 令和元年 8 月 1 9 日～ 2 8 日 (現場発掘作業)
令和元年 8 月 2 9 日～令和 2 年 3 月 (報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址 (H)・掘立柱建物跡 (F) 土坑 (D) である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988 年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



第 1 図 下曾根遺跡 X I 位置図

目 次

例言・凡例・目次

第 I 章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地
2. 調査体制
3. 調査日誌
4. 遺構・遺物の概要
5. 標準土層
6. 調査の方法

第 II 章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址
2. 掘立柱建物址
3. 土 坑
4. ピットと調査成果

写真図版

抄 録

発掘調査状況



第 I 章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地

下曽根遺跡 X I は、佐久市長土呂に所在し、芝宮遺跡群の南西よりに位置する。遺跡は、濁川を望む台地上に立地し、台地周辺の海拔は 730m 前後を測る。

本遺跡の周辺では、上信越自動車道路をはじめとし各種開発により発掘調査が行われている。特に、上信越道の調査では幅 2.6 ～ 9.6 m、深さ 2.2 m の大きな溝が検出され、海獣葡萄鏡が出土し注目を集めた。また、聖原遺跡においては古墳時代から平安時代の竪穴住居址が 900 軒以上調査され、皇朝十二銭や石製私印、甲斐型土器の「佛鉢」などが出土している。

今回、遺跡群内において有限会社サンコー地所により宅地造成工事が計画され、市教育委員会に文化財保護法 93 条の届出があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行った結果から遺跡の保護措置がとれない道路部分を中心に、記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。



第 2 図 周辺遺跡位置図

2. 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤晴樹					
事務局	社会教育部長	青木	源					
	文化振興課長	東城	洋					
	企画幹	吉田	晃					
	文化財調査係長	山本秀典						
	文化財調査係	小林真寿	羽毛田卓也	富沢一明				
		上原学	久保浩一郎(4月～11月)					
	調査員	赤羽根篤	浅沼勝男	小林妙子	堀籠まゆみ			
		堀籠保子	横尾敏雄	依田好行	中澤登			
		羽毛田利明	赤羽根充江	橋詰信子	木内修一			
		比田井久美子	大矢志慕					

3. 調査日誌

- 令和元年6月14日 有限会社サンコー地所より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
6月17日 長野県教育委員会へ市教育委員会より元佐教文振第1186-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
6月21日 長野県教育委員会より元教文第7-571号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
7月31日 有限会社市川測量設計より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
8月2日 有限会社サンコー地所と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
8月19日～28日 記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成作業を行う。
令和2年3月 報告書を刊行し、記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

4. 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址	6軒(奈良・平安)	掘立柱建物址	2棟	土坑	2基
遺物	土師器	須恵器	鉄製品	石器		

5. 標準土層

今回の調査地点は南西方向に僅かに傾斜する台地上で、基本層序は3層に分かれる。Ⅲ層上面が遺構確認面である。確認面深さは地表より20～40cmほどであった。

- 第Ⅰ層 10YR4/1 褐灰色土 耕作土でしまり弱い。
第Ⅱ層 10YR3/3 暗褐色土 しまり・粘性ややあり。
軽石と小石を含む。
第Ⅲ層 10YR5/6 黄褐色土 浅間P1層



表土除去状況(北より)

6. 調査の方法

遺構調査・遺構測量

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNo.を付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構No.で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

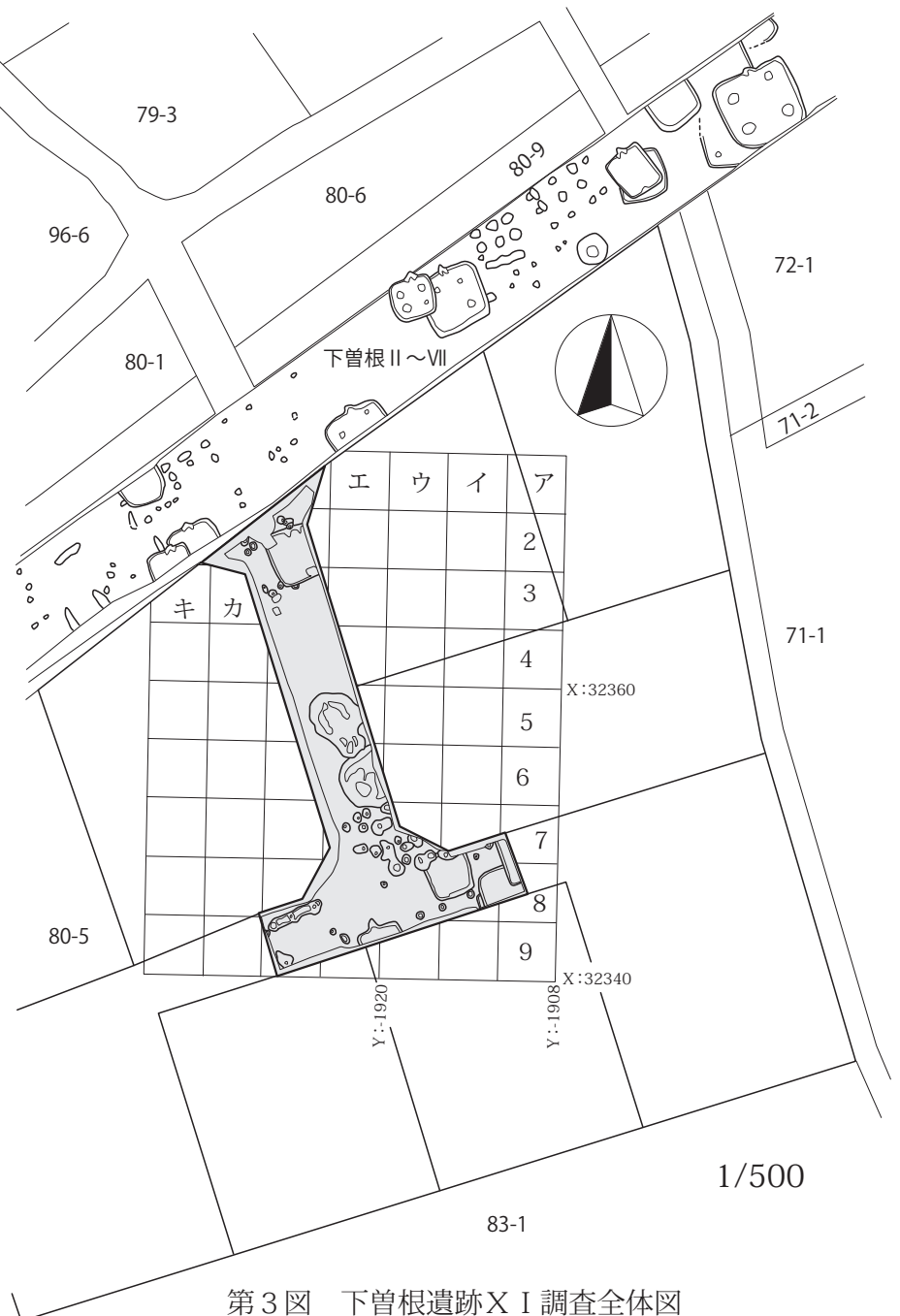
遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手でおこない、室内で乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。図面は遺構を1/40で修正、遺物を1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。

遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



第3図 下曽根遺跡X I 調査全体図

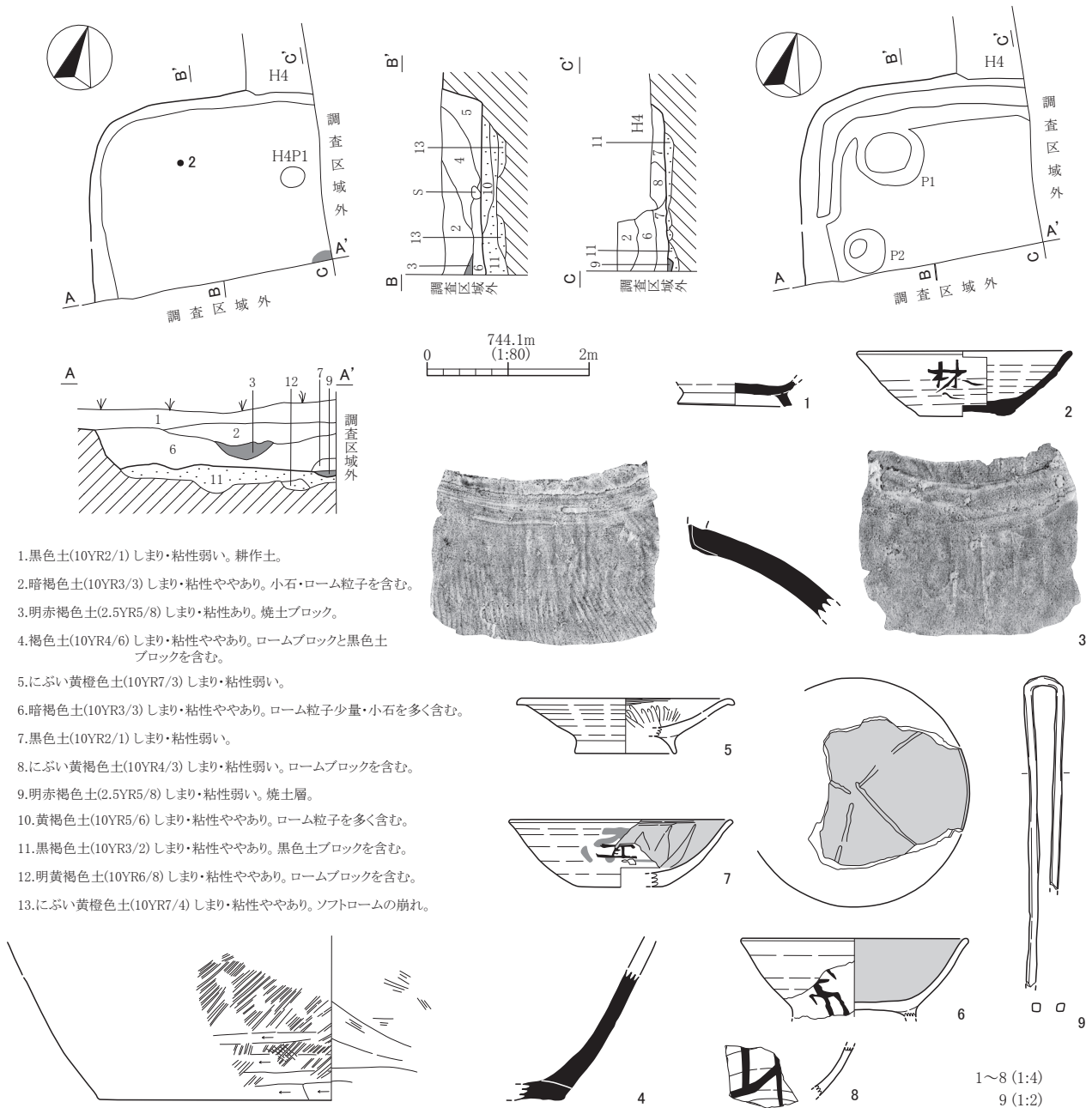
第II章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址

(1) H 1 号住居址

本址は調査区南側で検出された。住居北西コーナー部分が一部検出された。H 4 号住居跡より古い。形態は不明で、規模は南北長 2.13 m、東西長 2.72 m が検出された。検出された住居床面積は 5.58 m² である。壁の高さは西壁で 0.51 m を測る。ピットは掘方時も含め 2 ケ所で検出され、規模は P 1 は径 0.88 m・深さ 0.15 m、P 2 は径 0.56 m・深さ 0.53 m であった。

遺物は覆土を中心に出土した。9 点を図示した。1 と 2 は須恵器坏であり、1 は有台坏である。



第4図 H 1 号住居址及び出土遺物実測図

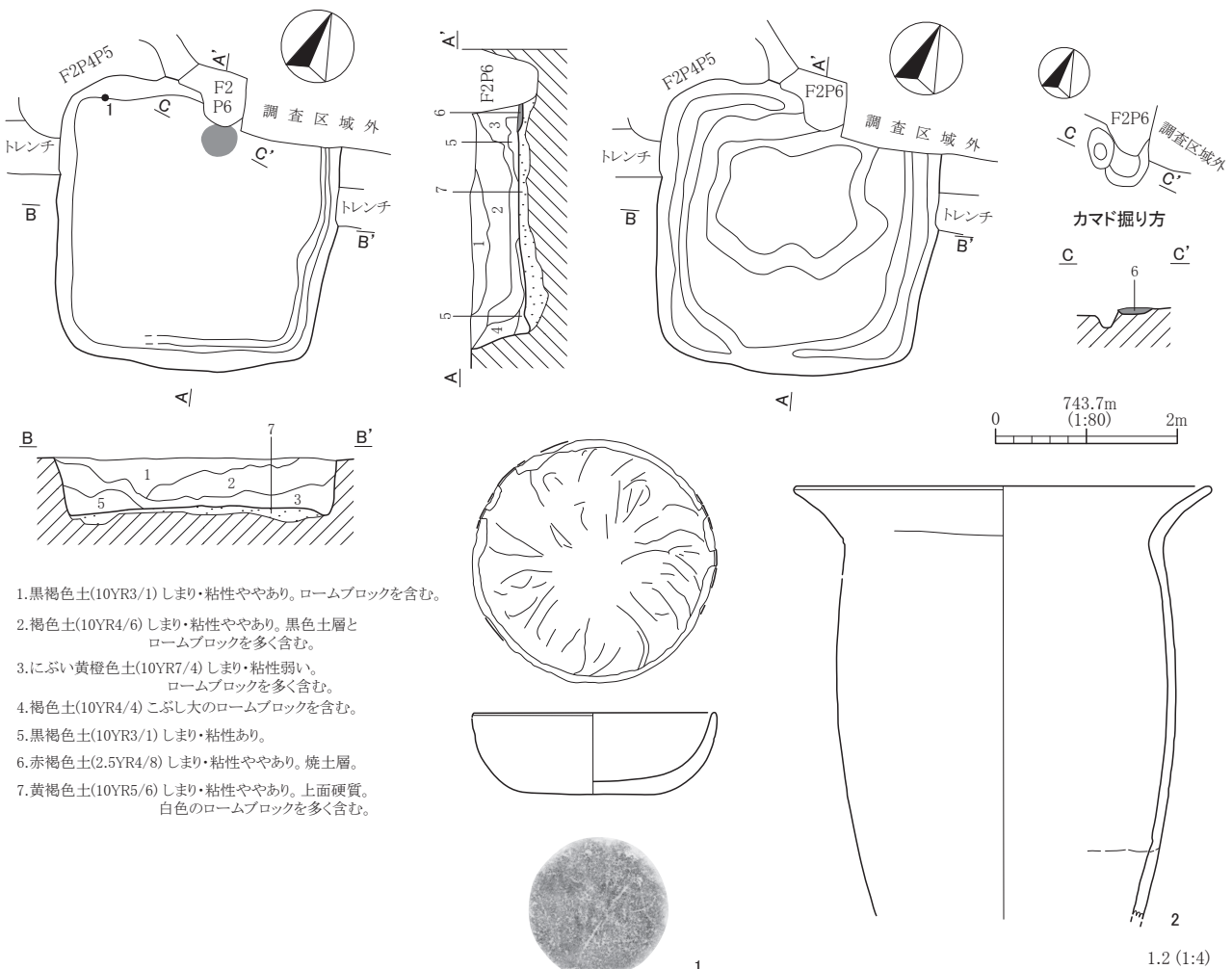
3と4は須恵器甕の胴部上半と底部付近の破片である。5は土師器皿、6は土師器椀、7と8は土師器坏である。いずれも墨書が確認でき、7は濃淡の墨書が確認できる。9は鉄製の鑿子と考えられる。本址の所産時期は9世紀後半と考えられる。

(2) H 2号住居址

本址は調査区南側で検出された。F 2号掘立柱建物址に北壁側を壊されている。形態は方形で、主軸方位はN - 19° - Wを測る。規模は、南北長 2.36 m・東西長 2.68 mを測る。住居床面積は検出部で 6.35㎡である。壁高は西壁で 0.64 mを測る。カマドは北壁中央に造られていたと考えられ、火床部のみが床面上に確認された。床は貼床が施されており、やや硬質化が確認された。住居掘方は中央部を一段高く掘り残したタイプであった。

出土遺物は少なく、2点を図示した。1はミガキが施された土師器坏であり、底部外面に木葉痕が確認できる。2は土師器甕であり、底部を欠損する。

本址はこれらの出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



第5図 H 2号住居址及び出土遺物実測図

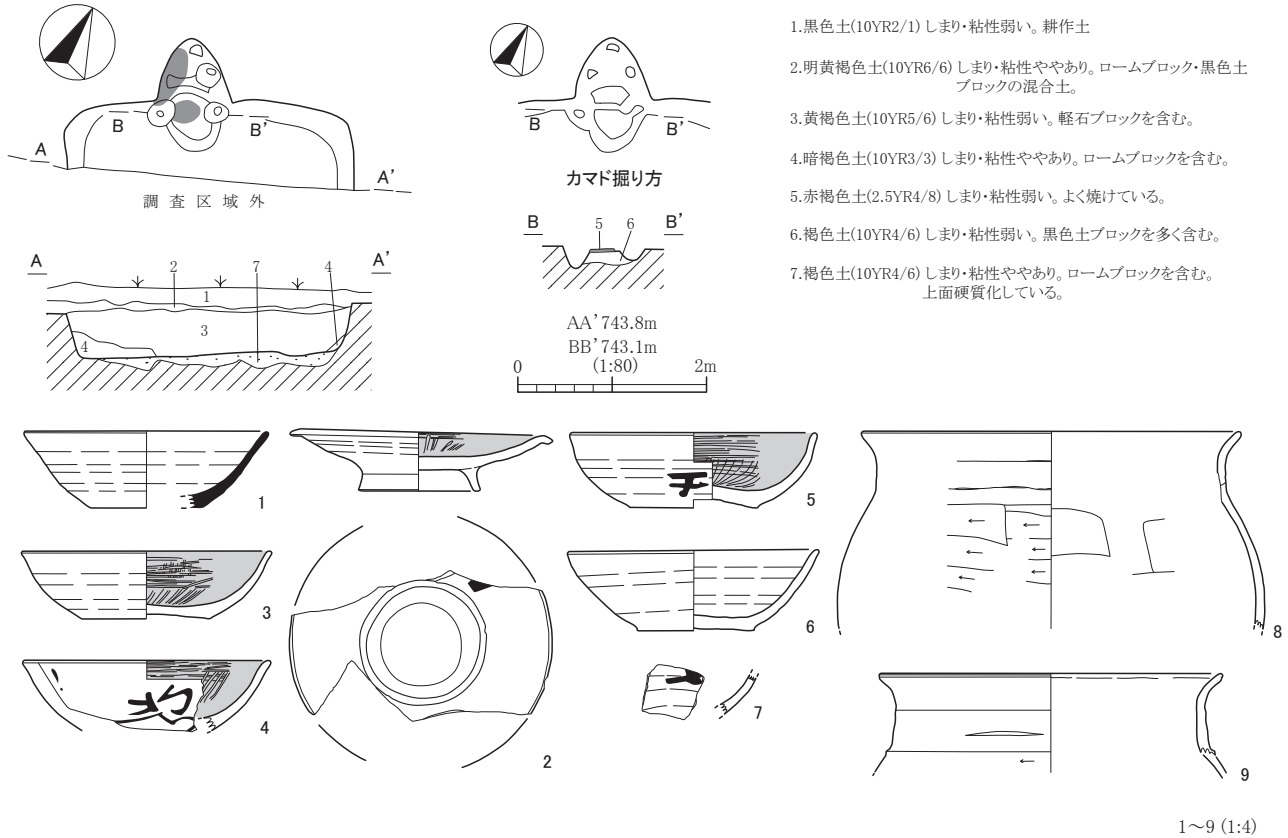
(3) H 3号住居址

本址は南側調査区で検出された。住居址のカマドを中心とした北側 1/3 が検出された。形態は方形と考えられ、長軸方位はN - 22° - Wを測る。規模は東西長 2.70 mを測る。住居床面積は検出部分で 1.66㎡である。壁高は東壁で 0.53 mを測る。床は 0.04 ~ 0.15 mの厚さで貼られており、カマ

ド前は顕著に硬かった。カマドは袖の構築材は残存しておらず、火床部が確認された。

本址からの出土遺物は覆土から比較的多く出土した。1は須恵器坏である。2は土師器皿、3～7は土師器坏である。墨書が確認される土器があるが判読は不明である。8と9は土師器甕である。

本址はこれらの出土遺物より9世紀後半の所産と考えられる。



第6図 H3号住居址及び出土遺物実測図

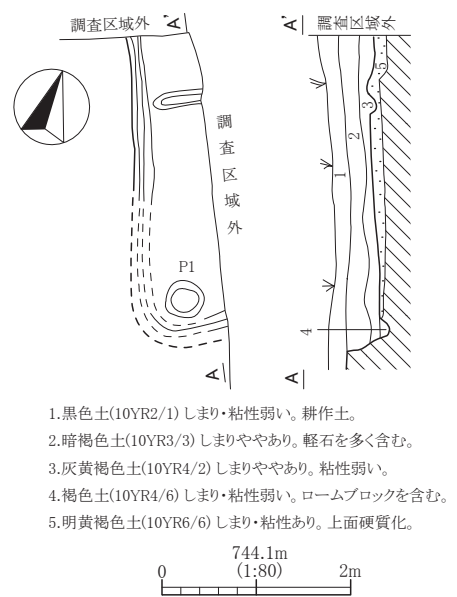
(4)H4号住居址

本址は調査区南側で検出された。H1号住居址より新しい。形態は不明で、南西コーナー部のみの検出である。検出面積は1.94㎡を測る。壁高は南壁側で0.40mを測り、壁下には壁溝が巡っていた。ピットは1か所で確認され、規模はP1が径0.41m・深さ0.39mを測る。

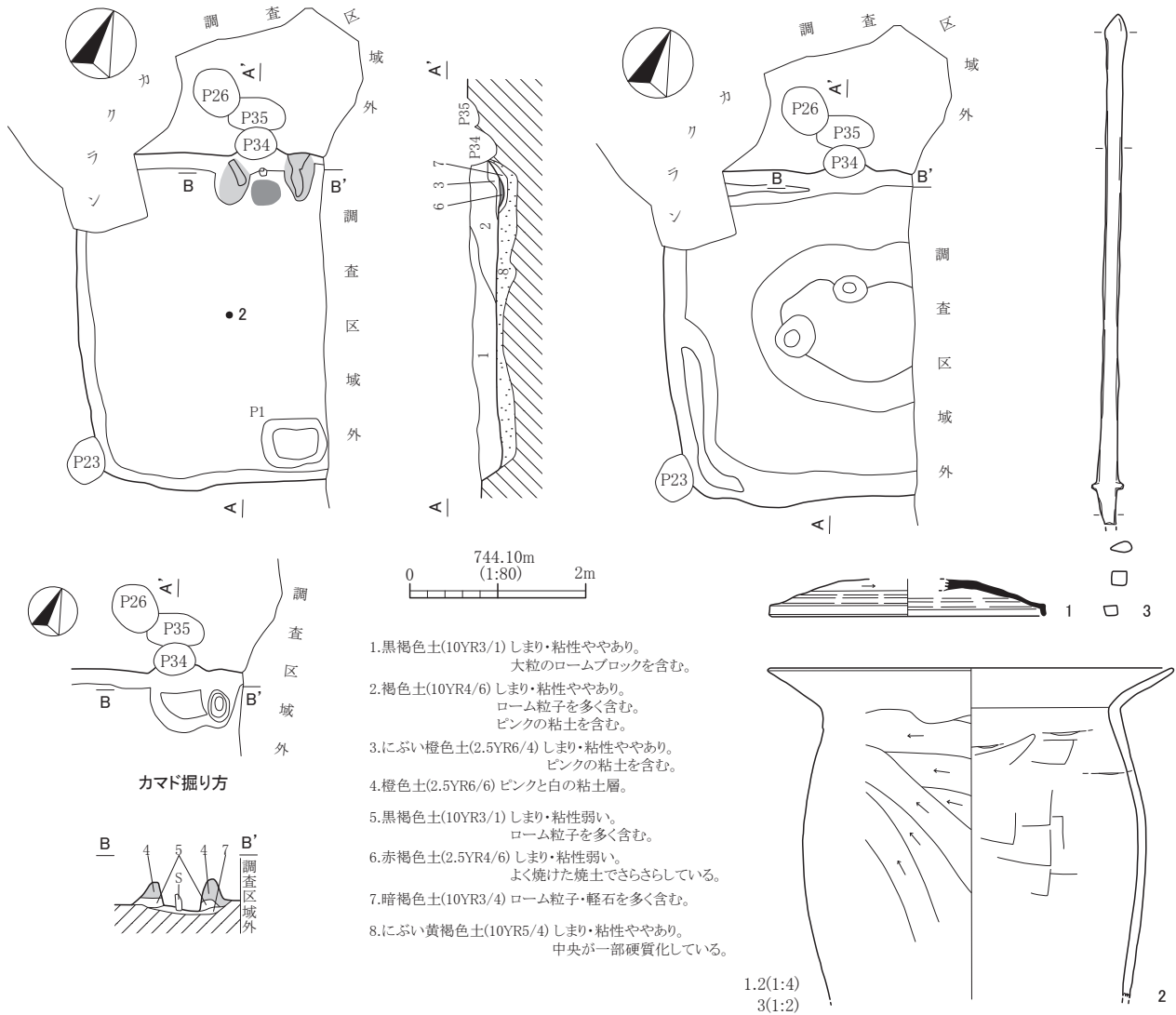
本址からの出土遺物は非常に少なく、図示できるものは無かった。本址の所産時期は不明である。

(5)H5号住居址

本址は調査区北側で検出された。西側2/3程が検出された。形態は方形で、北壁側カマドを構築している。主軸方位はN-24°-Wである。規模は南北長3.42mで、検出部分の東西長2.58mを測る。住居床面積は検出部で8.89㎡、推定では13.28㎡を測る。壁高は西壁中央で0.32mを測る。床はカマド前を中心に硬質化しており、0.07～0.22mの厚みで貼られていた。ピットは入口付近で方形のピットが確認され、規模は径0.75m・深さ0.26mを測る。



第7図 H4号住居址実測図



第8図 H5住居址及び出土遺物実測図

カマドは北壁中央で検出されており、袖は粘土で構築されていた。煙道部は単独ピットにより破壊されていた。火床部はよく焼けていた。住居掘方は中央部が一段高く掘り残す状態であった。

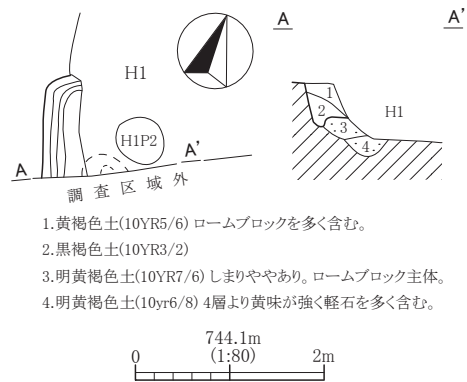
出土遺物は覆土とカマド付近を中心に出土した。図示した遺物は3点で、1は須恵器蓋である。天井部が欠損している。2は土師器甕で、住居中央の床面上から出土した。3は長頸鉢で関が確認できる。

これらの出土遺物から不確実はあるが8世紀代の所産が考えられる。

(6) H6号住居址

本址は調査区南側で検出された。H1号住居跡にほとんどが削平されており、住居北西コーナー部のみの検出となった。形態・規模等は不明であるが、壁溝のみ確認できた。

出土遺物は無く、時期も不明である。



第9図 H6号住居址実測図

2. 掘立柱建物址

(1) F 1号掘立柱建物址

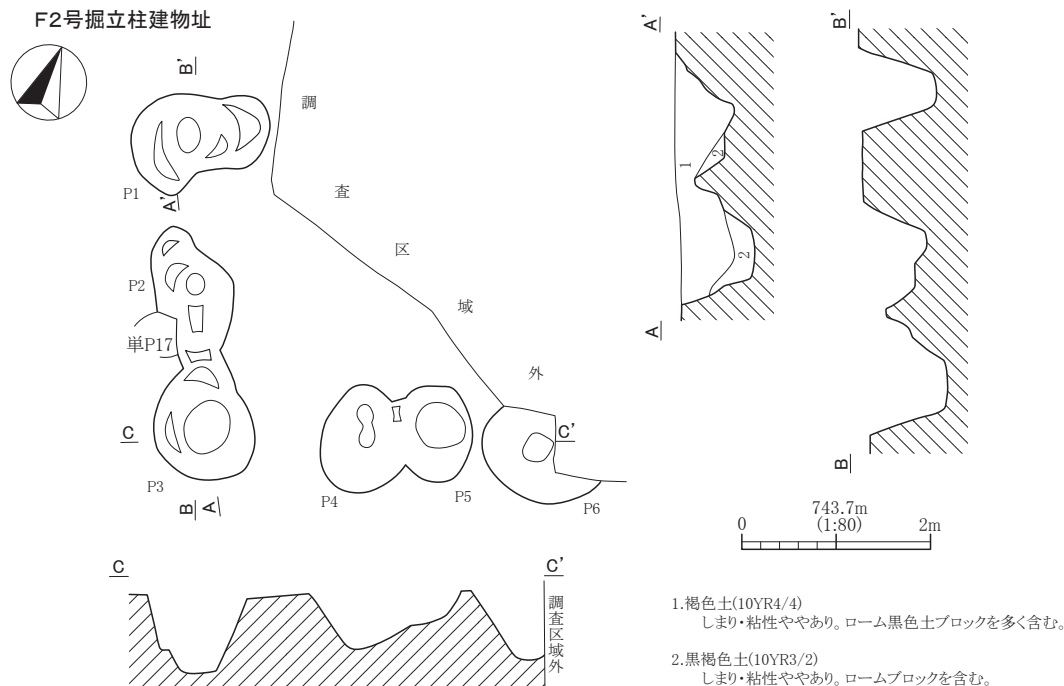
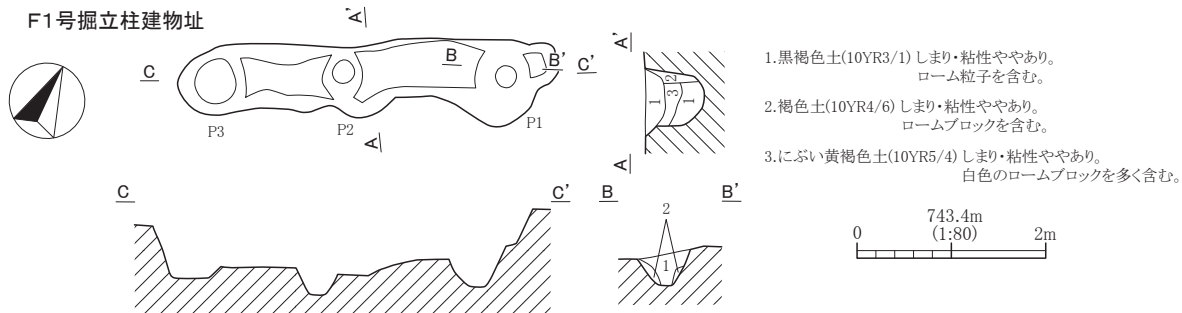
本址は、調査区西側で検出された。検出状況より北側に広がる溝持ちの側柱式建物址の一部と判断した。各ピットの規模はP 1が径0.94 m・深さ0.83 m、P 2が径0.69 m・深さ0.80 m、P 3が径0.75 m・深さ0.58 mである。P 1からP 3のピット中心間の距離は3.11 mである。

本址からの出土遺物は須恵器甕・坏、土師器甕等が出土したが、いずれも小片で図示はできなかった。所産時期も不明である。

(2) F 2号掘立柱建物址

本址は、調査区中央南よりで検出された。H 2号住居址より新しく、東側は調査区域外となる。形態は大型の単独ピットが連結する側柱式建物址と考えられる。各ピットの規模はP 1が径1.50 m・深さ0.79 m、P 2が径1.42 m・深さ0.64 m、P 3が径1.30 m・深さ0.81 m、P 4が径1.15 m・深さ0.65 m、P 5が径1.04 m・深さ0.36 m、P 6が径1.24 m・深さ0.79 mである。P 3からP 6のピット中心間の距離は3.50 m、P 1からP 3のピット中心間の距離は3.12 mである。

本址からの出土遺物はP 1より須恵器甕・坏等が出土したが、いずれも小片で図示はできなかった。所産時期も不明である。



第10図 F 1・F 2号掘立柱建物址実測図

3. 土 坑

(1) D 1 号土坑

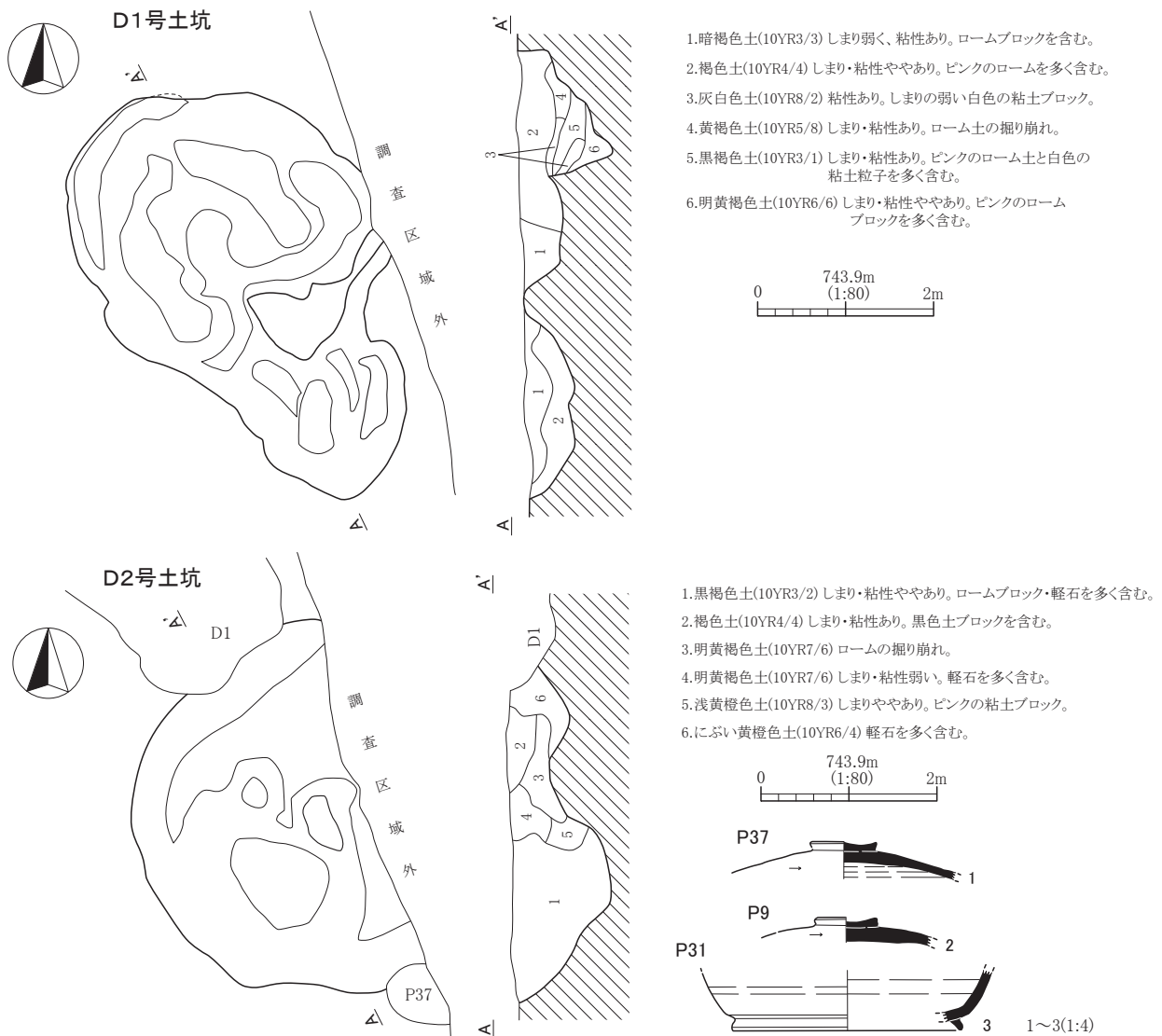
本址は、調査区中央で検出された。形態は不整形で、規模は長軸長 5.16 m、短軸長 3.32 m である。深さはもっとも深い部分で 1.13 m を測る。土坑底面は複雑に起伏がある状況であった。本址覆土は北側から南側に掻きだすような堆積状況であり、覆土内に白色やピンク色の粘土化したローム土がブロック状に堆積しており、いわゆる「粘土採掘坑」的な状況を示した。

本址からの出土遺物は須恵器甕・坏、土師器甕等が出土したが、いずれも小片で図示はできなかった。所産時期も不明である。

(2) D 2 号土坑

本址は、調査区中央で検出された。形態は不整形で、規模は長軸長 4.32 m、検出部分の短軸長 2.60 m、深さ 1.15 m を測る。堆積状況は D 1 号土坑と酷似しており、検出位置も D 1 号土坑の南側に軸をそろえるような形で検出されていることから、D 1 と同じ性格の遺構と考えられる。

本址からの出土遺物は須恵器甕・坏、土師器坏等が出土したが、いずれも小片で図示はできなかった。所産時期も不明である。

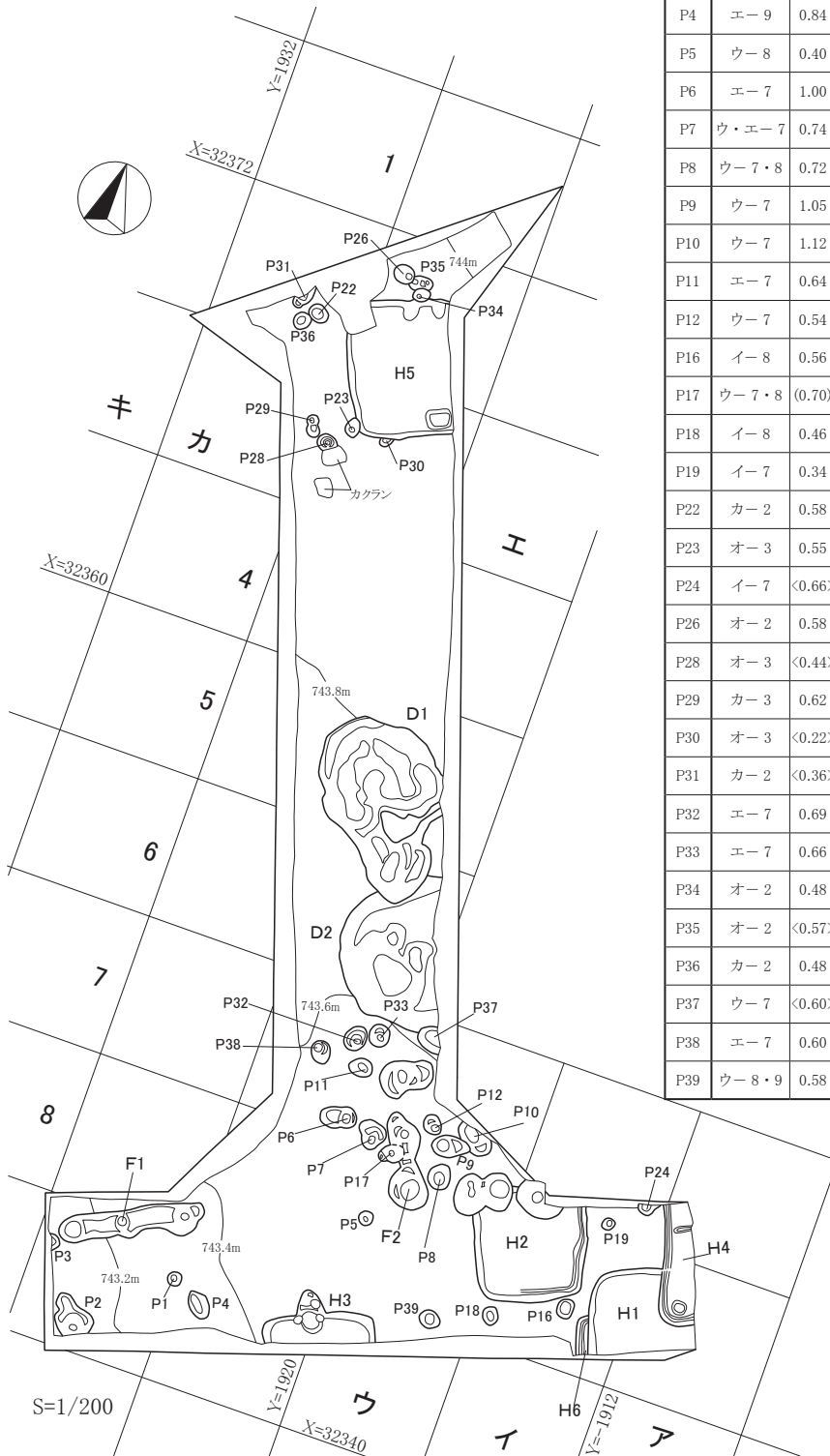


第 11 図 D 1・D 2 号土坑及びピット出土遺物実測図

4. ピットと調査成果

本調査では39個の単独ピットを検出した。南側のP16～P39で柵列的な様相も観察できたが、その他はいずれも不規則な配置で、形態・深さも統一性は確認できなかった。

() 推定 < > 残存 (単位 cm)



第12図 ピット及び調査全体図

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物 重複関係	備考
P1	エー9	0.40	0.40	0.34	円形	灰釉皿 須恵器杯	黒色土(10YR2/1)
P2	オー9	<1.22>	0.96	1.01	不整形	土師器クロコ甕 土師器杯(内黒)	黒色土(10YR2/1) さらさらしている。
P3	オー9	0.44	<0.20>	0.31	—	須恵器甕	黒色土(10YR2/1)
P4	エー9	0.84	0.50	0.29	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P5	ウー8	0.40	0.40	0.31	円形		黒色土(10YR2/1)
P6	エー7	1.00	0.56	0.49	楕円形	須恵器杯 土師器杯(内黒)	にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒子多い。
P7	ウーエー7	0.74	0.50	0.70	不整形	土師器杯	黒色土(10YR2/1)
P8	ウー7・8	0.72	0.62	0.36	円形		黒色土(10YR2/1)
P9	ウー7	1.05	0.54	0.48	楕円形	須恵器蓋	にぶい黄褐色土(10YR4/3)
P10	ウー7	1.12	<0.52>	0.40	楕円形		にぶい黄褐色土(10YR4/3)
P11	エー7	0.64	0.56	0.46	円形		黒色土(10YR2/1)
P12	ウー7	0.54	0.40	0.44	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P16	イー8	0.56	0.44	0.31	方形		黒色土(10YR2/1)
P17	ウー7・8	(0.70)	0.52	0.45	不整形		黒色土(10YR2/1) ローム粒子多い。
P18	イー8	0.46	0.42	0.34	方形		黒色土(10YR2/1) ローム粒子多い。
P19	イー7	0.34	0.32	0.50	円形		黒色土(10YR2/1) ローム粒子多い。
P22	カー2	0.58	0.46	0.23	方形		黒色土(10YR2/1)
P23	オー3	0.55	0.40	0.26	—	土師器甕	黒色土(10YR2/1)
P24	イー7	<0.66>	<0.28>	0.30	—		にぶい黄褐色土(10YR4/3)
P26	オー2	0.58	0.42	0.49	楕円形	須恵器杯 須恵器高台杯	にぶい黄褐色土(10YR4/3)
P28	オー3	<0.44>	0.50	0.38	—	武蔵甕	にぶい黄褐色土(10YR4/3)
P29	カー3	0.62	0.32	0.31	不整形		黒色土(10YR2/1)
P30	オー3	<0.22>	0.32	0.22	—		黒色土(10YR2/1)
P31	カー2	<0.36>	<0.22>	0.57	—		黒色土(10YR2/1)
P32	エー7	0.69	0.57	0.61	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P33	エー7	0.66	0.56	0.52	楕円形	須恵器杯	黒色土(10YR2/1)
P34	オー2	0.48	0.37	0.34	楕円形	H5を切る。	黒色土(10YR2/1)
P35	オー2	<0.57>	0.35	0.28	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P36	カー2	0.48	0.44	0.33	円形		黒色土(10YR2/1)
P37	ウー7	<0.60>	0.70	0.57	—	須恵器蓋・甕 土師器杯(内黒)	にぶい黄褐色土(10YR4/3)
P38	エー7	0.60	0.52	0.51	楕円形	土師器(内黒) 武蔵甕	にぶい黄褐色土(10YR4/3)
P39	ウー8・9	0.58	0.46	0.44	楕円形		黒色土(10YR2/1)

第1表 ピット計測表

成果は、調査面積が限られており、全体を把握できた遺構も少なかったが、北側の市道部分も含め、台地全体に奈良・平安時代の集落が展開する様相が見えてきた。

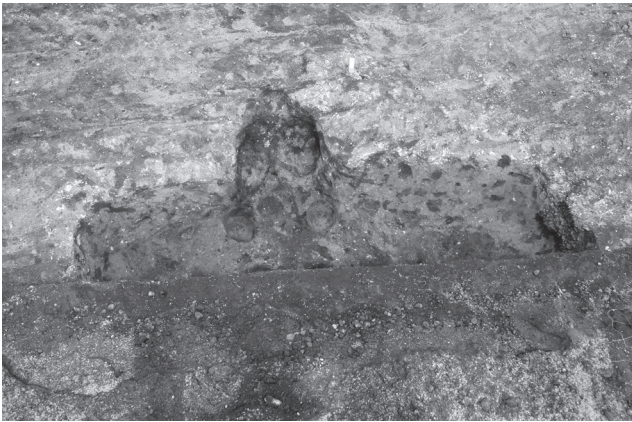
今後もこのような調査を重ねることにより、台地全体の集落様相把握に努めていきたい。



H 1 号住居址



H 2 号住居址



H 3 号住居址



H 4 号住居址



H 5 号住居址

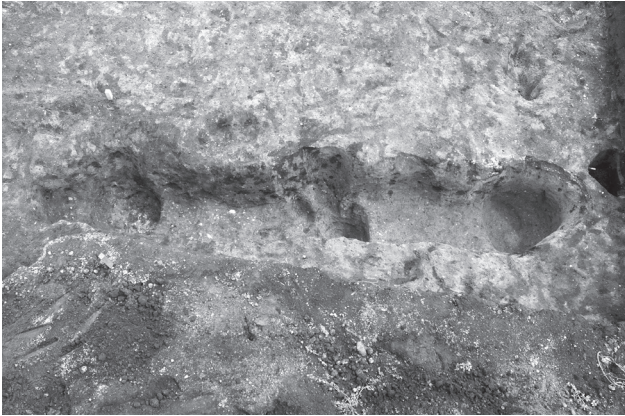


H 6 号住居址

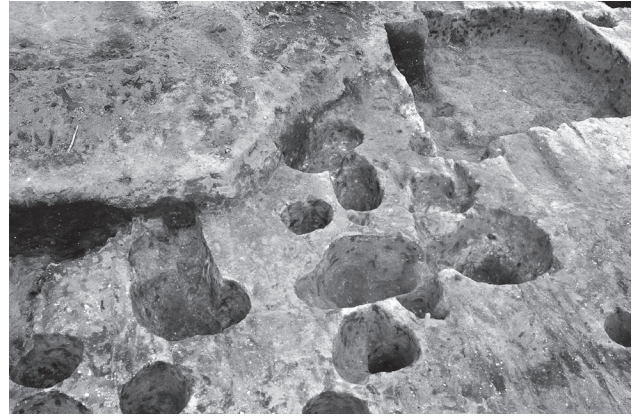


調査区南側全景(東より)

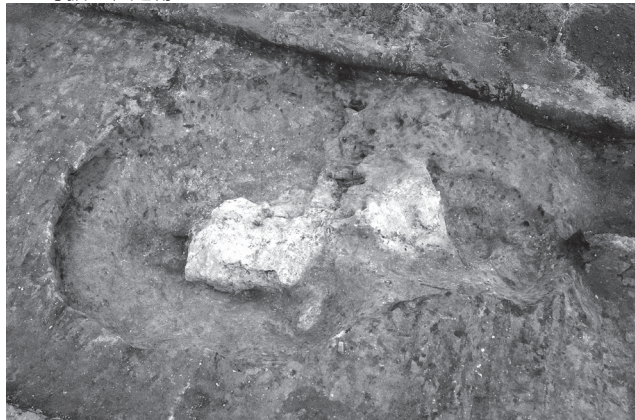
図版 2



F 1号掘立柱建物址



F 2号掘立柱建物址



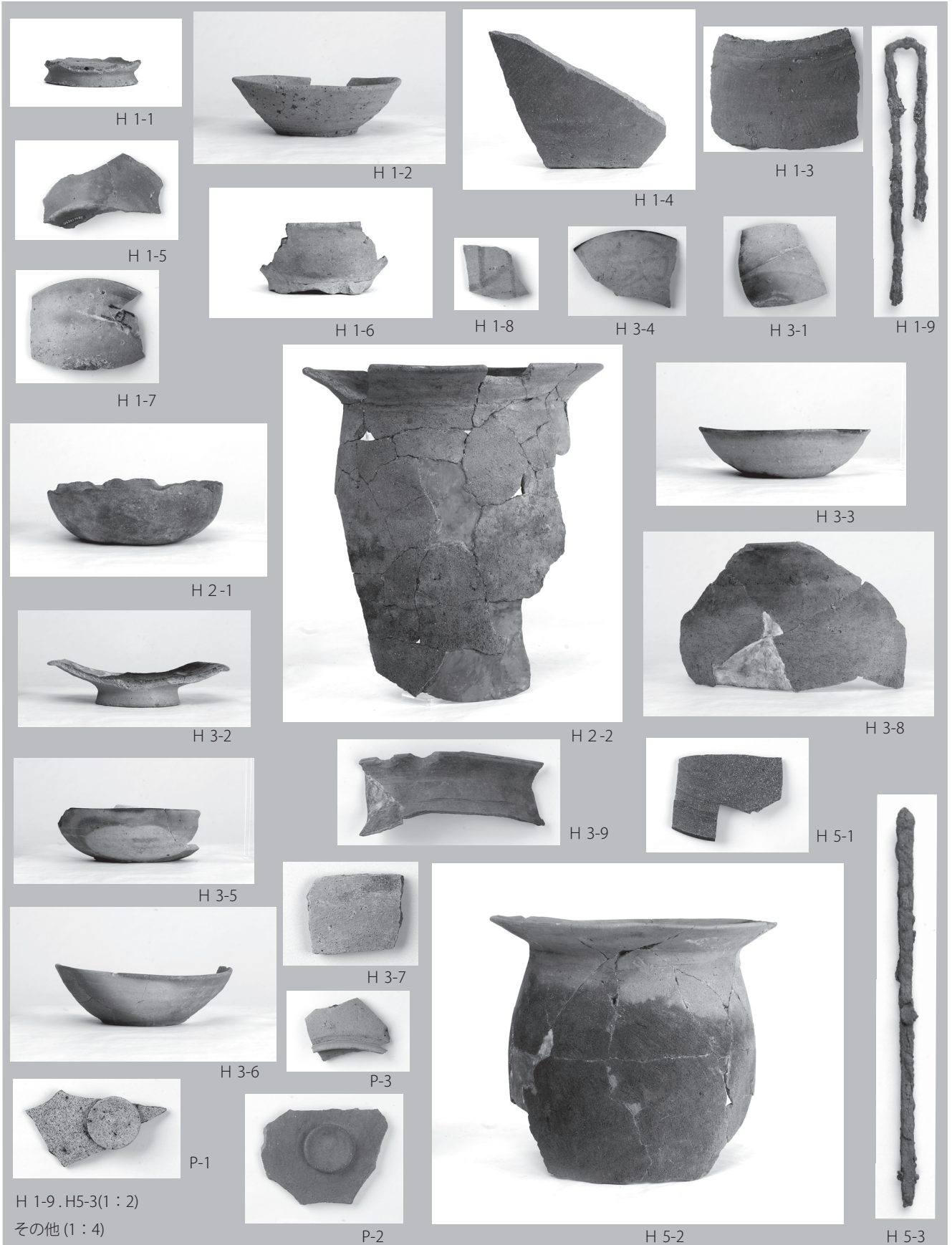
D 1号土坑



D 2号土坑



調査区全景(南より)



報告書抄録

ふりがな	しばみやいせきぐん しもそねいせきじゅういち							
書名	芝宮遺跡群 下曾根遺跡X I							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第269集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2020年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しばみやいせきぐん しもそねいせき じゅういち 芝宮遺跡群 下曾根遺跡X I	さくしおたい 佐久市小田井 81-1	20217	8	36° 17.30	138° 28.43	20190819 ～ 20190828	182	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
芝宮遺跡群 下曾根遺跡X I	集落址	奈良・ 平安	住居址 6軒 掘立柱建物址 2棟 土坑 2基	土師器 須恵器 石製品 鉄製品				
要約	台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に奈良・平安時代と考えられる住居跡が検出された。							

 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第269集

芝宮遺跡群 下曾根遺跡X I

2020年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

 印刷所 双葉印刷
